

どう進める？

高校の特色化・魅力化

生徒を主語にした学校づくりに向けて

高校教育を取り巻く環境が大きく変化する中、各校には特色化・魅力化が求められています。その転機となったのが、2020年11月に公表された「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）」です。同まとめでは「各高等学校の特色化・魅力化に向けた方策」が高校教育改革の柱の1つとして位置づけられました。そしてそれは、その後に出された中央教育審議会答申（*）などにも引き継がれ、26年2月に公表された「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた『N-E.X.T.（ネクスト）ハイスクール構想』～」においても、高校教育改革を進める上で重視する視点の中で「各高校の特色化・魅力化」が打ち出されています（図1）。

同構想では、先導的な学びのあり方の構築を改革先導拠点校が担うこととなりますが、その取り組みや成果を協力校や域内の高校に広く共有・普及することにより、地域全体の高校教育の質の向上が期待されます。すなわち、同構想は多くの高校が自校の特色を明確化し、その魅力を高めていく改革とも言えるのではないのでしょうか。

各校が特色化・魅力化を進めていく上で忘れてはいけないのは、それらを「生徒を主語にした」ものにするという視点です。では、そうした視点を踏まえた特色化・魅力化はどのように進めていけばよいのか―本特集では、実践者の話や事例を通じて、その問いのヒントを探りました。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 課題整理

自校の「特色」を明確化し、生徒が感じる「魅力」を高める

全国普通科高等学校長会 事務局長 佐藤 到^{いたる}

長崎県立佐世保南高校 校長 舟越 裕^{ひろし}

P.8 事例1 市部・公立

学校設定教科を学びの土台とし、
時代に対応する文理融合型の新しい普通科を創る

熊本県・熊本市立必由館高校^{ひつゆかん}

P.11 事例2 市部・私立

暗黙知として受け継がれてきた全人教育の文化を言語化。
教師と生徒の共通の指針に

大阪府・私立大阪高校

P.14 事例3 郡部・公立

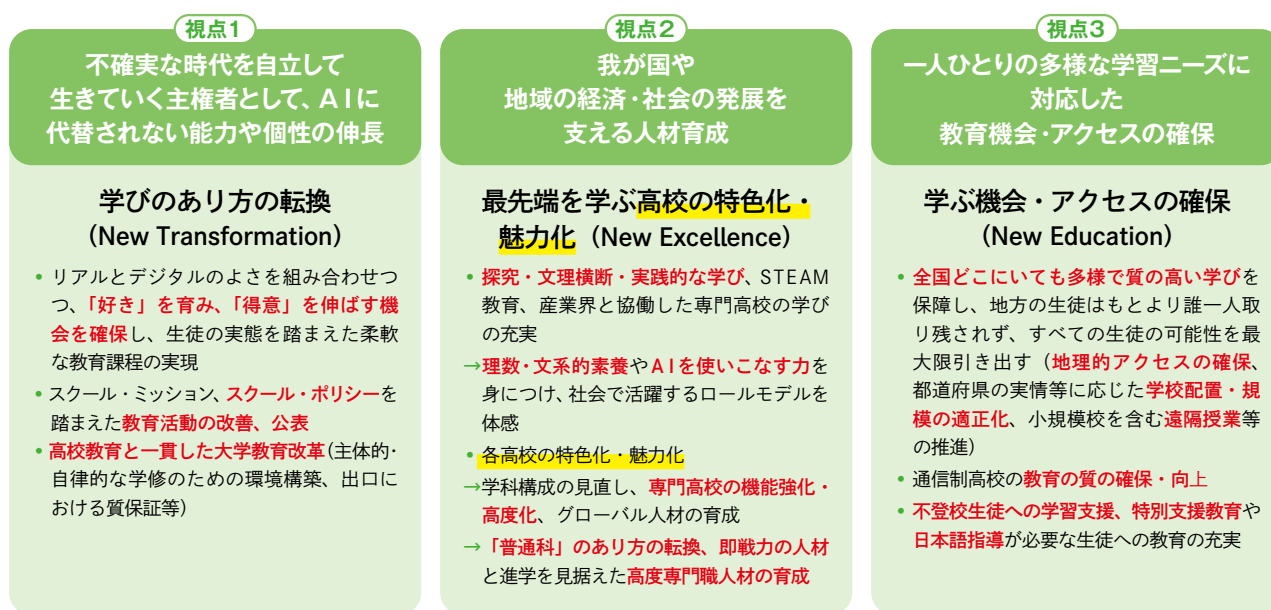
地域資源・課題をテーマとするプロセス重視の探究学習を、
町役場と連携して進める

岩手県立葛巻高校^{くづまき}

*『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2021年1月）。



図1 高校改革の方向性 ～2040年に向けた高校の姿～

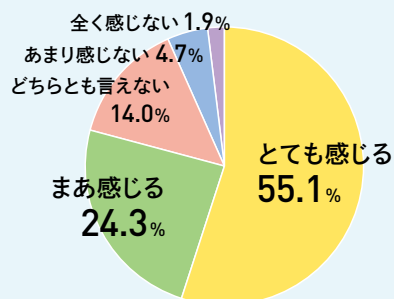


3つの視点を重視しながら、さらなる高校改革を進め、N-E.X.T. ハイスクール構想を実現する。
高校から大学・大学院に至るまでの一貫した改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材を育成する。

※文部科学省「高校教育改革に関する基本方針(グランドデザイン) ～2040年に向けた『N-E.X.T.(ネクスト) ハイスクール構想』～【概要】(2026年2月)を基に編集部で作成。下線は編集部による。

図2 教師が感じる「自校の特色化・魅力化」の必要性

Q. ご勤務校において「自校の特色化・魅力化」に取り組む必要性をどの程度感じますか。



※図2・3ともに、『VIEW next』高校版 読者モニターアンケート結果より(アンケートは2026年3月にウェブで実施。有効回答数は107)。

図3 特色化・魅力化の推進にあたっての課題

Q. 自校の特色化・魅力化に取り組む上での課題を教えてください。

- あまりにも取り組み内容が飛躍しすぎていて、どんな生徒像を目標にしているのか分からないところがある。(北海道・私立)
- 特定の分野の資格が取得できるコースを設置したものの、現時点では受験者数の増加にはつながっていない。(千葉県・公立)
- 特色化・魅力化を「自分たちがよいと思うもの」という基準だけで設計してしまうと、社会が求めていることや外の世界の変化との整合性が取れなくなる。(静岡県・私立)
- 取り組みに対する教師の温度差がある。また、取り組みがなかなか学校への評価につながらない。(長崎県・公立)
- 教育目標を教師間に浸透させ、それに基づいた教育活動を実践することが難しい。(愛知県・私立)

文部科学省は、高校改革の方向性を3つの視点で示している(図1)。本誌の読者からも、「この少子化の時代に、必要とされる学校であり続けるために、特色化・魅力化は必須」「生徒が自分の興味・関心に合わせて学べる学校になるために、画一的な教育課程から脱却しなければならない」といった声があり、「自校の特色化・魅力化」の必要性を感じている教師は約8割に上った(図2)。一方、

特色化・魅力化の推進においては、その方向性や教師間の温度差などについての課題があるようだ(図3)。そうした課題が生じるのは、「特色化」と「魅力化」のそれぞれが意味することについて、校内で共通理解が図れていないからではないだろうか。そこで今号では、特色化・魅力化が意味することを整理した上で、各校が特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのかについて考えていく。

先生方とともに
考えたい「問い」

特色化・魅力化のそれぞれが意味することは何か。
各校は特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのか。

自校の「特色」を明確化し、 生徒が感じる「魅力」を高める

普通科を含むすべての高校に「生徒を主語にした」魅力的な学校づくりが求められている。

なぜ、高校の特色化・魅力化が必要とされているのか。

どのようにそれを推進していけばよいのか。

神奈川県立横浜翠嵐高校の元校長で、全国普通科高等学校長会

事務局長として全国の高校を知る佐藤到先生と

普通科改革の先駆的な取り組みの経験を持つ

長崎県立佐世保南高校の舟越裕校長に、

VIEW next 編集部のおき・あやこが話を聞いた。



長崎県立
佐世保南高校
校長
舟越 裕



全国普通科高等学校長会
事務局長
佐藤 到

社会の変化や多様な生徒に
応えられる特色や魅力を

青木 2022年度から文部科学省が

推進している「新時代に対応した高等学校改革推進事業」を始めとして、近年、「生徒を主語にした」高校教育の実現に向けて、すべての高校において特色・魅力ある教育の実現が求められています。26年2月に文部科学省が示した「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想」(*)においても、専門高校改革や普通科改革を通じて高校の特色化・魅力化を図っていく必要性や、小規模校の特色化・魅力化のための教育条件の改善等が示されています。なぜ、高校の特色化・魅力化が必要とされているのでしょうか。

佐藤 現在、高校等への進学率は約99%に達し、その約7割の生徒が普通科に在籍しています。ただこれまで、普通科の教育内容は中学生や保護者には高校ごとの違いが分かりにくく、「行きたい高校」ではなく、「入れる高校」を選んでいた生徒が少なくなかったのではないのでしょうか。しかし、少子化が進み、多くの自治体で公立高校の学区が撤廃される中、各高校は自校の特色・魅力を中学生や保護者に伝え、選ばれる高校になる必要性が生じてきま

進行



VIEW next
編集部
青木 彩子
あおき・あやこ

した。また、実社会につながる生きた授業の実践も、特色の1つとして高校に求められています。「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想」が示されたのも、Society 5.0に対応できる、文理にとられない幅広い教養等を備えた新しい価値を創造する人材の育成に高校も寄与することが期待されているからです。

舟越 長崎県では、これまでは多くの生徒、保護者が、公立高校の普通科を進学先の第一候補として考えていました。しかし近年、私立高校が新コースの設置や部活動の強化などを通じて特色化を図り、私立高校の授業料も無償化されたことで、生徒、保護者にとって私立高校の魅力が高まりました。また、生徒の学力や希望進路などが多様化する中で、特に公立高校は、これまでと同じような横並びでよいのかと社会から問われているように思います。長崎県では少子化が進み、高校の再編統合が進む見通しですが、高校の数の調整だけではなく、各地域にどのような高校を残し、創っていくのかを考えていく必要があると思っています。

* 高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた「N-E.X.T.(ネクスト)ハイスクール構想～」

どう進める？ 高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

特色は学校と教師がつくるもの、
魅力は生徒が感じるもの

青木 現場の先生方は、特色化・魅力化の必要性は感じていられるけれども、その推進には課題があるようです（P.3 図2・3）。先生方の声から、その課題の真因の1つに、特色化・魅力化はそれぞれ何を意味するのか、校内で共通理解が図れていないことがあるのではないかと感じました。高校の特色化・魅力化はどのようなものとして捉えればよいと思われますか。

佐藤 私は学校の「特色」は、学校自身や設置自治体が地域のニーズなどを踏まえて骨組みを設計し、授業などの日々の教育活動を通じて教師たちがつくり上げていくものだと思っています。一方「魅力」は、特色ある教育活動を通じて生徒たちが感じる楽しさや



さとう・いたる 神奈川県立松陽高校、同・横浜翠嵐高校で校長を務めた後、神奈川県立総合教育センター顧問、横浜国立大学教職大学院連携教授を歴任。22年度から現職。教諭時代の担当教科は地理歴史科・公民科（地理・福祉科）。

学びが、満足感だと考えています。

青木 今のお話を踏まえると、自校の特色化・魅力化は、「自校の独自性が明確か」「生徒や保護者・地域が満足しているか」という2つの視点で整理できそうです（図1・2）。

舟越 私が24年度3月まで3年間校長を務めた長崎県立松浦高校は、22年度にそれまでの普通科を、地域課題などの探究に重点的に取り組む地域科学科に改編しました。私たち教師が力を入れたのは、地域科学科とはどのような特色を持った学科なのかを生徒や保護者に伝えることでした。つまり、図2の取り組み③の状態から取り組み①の状態にすることを目指したのです。また、私は、教育活動自体には明確な独自性がない中でも、学校が持つ自由な校風のおかげで生徒たちを引きつけていた、取り組み②のようなことを行っている学校に勤務したこともありまし



ふなこし・ひろし 長崎県立佐世保北高校で進路指導主事として同校の進路指導をけん引。同・佐世保西高校で教頭、同・松浦高校で校長を務め、25年度から現職。教諭時代の担当教科は地理歴史科（日本史）。

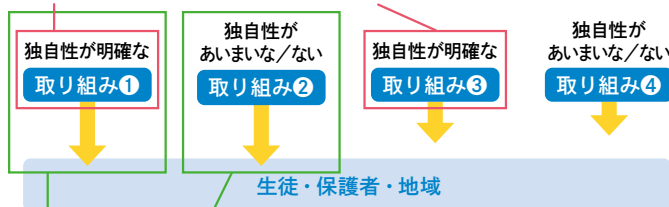
図1 特色化と魅力化の意味

	特色化	魅力化
意味	自校の独自性を明確にすること	「この学校に来てよかった」「この学校があつてよかった」と生徒・保護者・地域が満足している状態をつくること
留意点	- 他校との比較に基づく - 客観的な評価が可能	- 生徒・保護者・地域の人々一人ひとりの評価に基づく - 主観的な評価によるもの

※取材を基に編集部で作成。

図2 特色化と魅力化の関係

特色化できている（自校の独自性が明確になっている）



魅力化できている（取り組みの価値が届き、生徒・保護者・地域が満足している）

- ・取り組み①は、独自性が明確で（＝特色化）、生徒・保護者・地域が満足している（＝魅力化）理想的な状態。
- ・取り組み②は、独自性があいまいだ（または、ない）が、生徒・保護者・地域が満足しているものなので継続すべき取り組み。特色として自覚したり、独自性を明確にしたりすれば、一層魅力を高められる可能性がある。
- ・取り組み③は、生徒・保護者・地域にはその価値が届いていないが、独自性が明確なので、改善の余地あり。

※取材を基に編集部で作成。

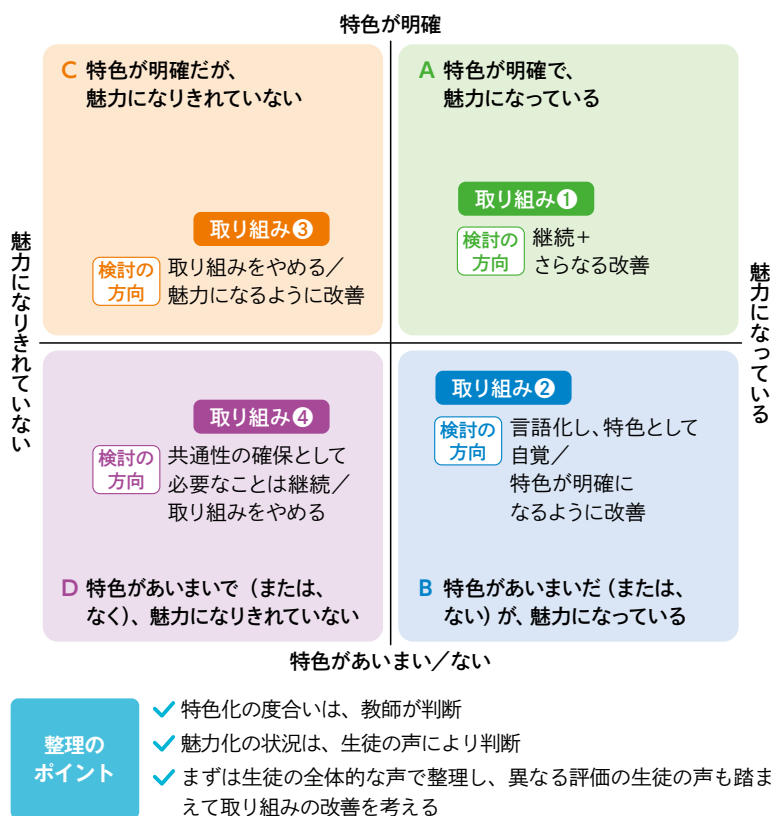
た。取り組み①や取り組み②のようなことを行っている学校では、生徒が「自分に合った学び、高校生活だ」などと満足感を持ち、それを家庭や地域で語ることで、中学生やその保護者も魅力を感じるようになるのだと思います。

佐藤 例えば成果などが数値として表れにくい探究学習の価値について、生徒の前にまずは教師が、自校の探究学習のよさを深く理解しておくことが不可欠です。探究学習を推進するために学校設定教科・科目を設ける学校もあります。同教科・科目において生徒

が何を、どのように学ぶのかを、教師たちが熟議し、十分に理解しながらつくり上げるほど、生徒は探究学習に魅力を感じるようになると思います。

舟越 松浦高校在任中、先生方と話し合い、地域に対する理解を深める学校設定科目「松浦学」を設定することにして、さらに長崎大学教育学部と連携し、数学、英語などの6教科で、地域の素材を活用した公開授業を実施しました。そうした取り組みを通じて私たち教師は、地域科学科とはどのような学科なのかを深く理解していったよう

図3 自校の取り組みの現状を整理する4象限マトリクス



※取材を基に編集部で作成。

に思います。現在の勤務校である長崎県立佐世保南高校は、23年度に普通科とは別に文理探究科を設置しました。本校においても、総合的な探究の時間を軸にしつつ、カリキュラム全体のあり方を検討し続けることで、文理探究科の特色をより鮮明に打ち出していくことができると思っています。

佐藤 私は、自校の特色を生徒や保護者に伝える教師の言葉を大切にしています。かつて校長を務めた神奈川県の立横浜翠嵐高校では「高校生としての覚悟」を生徒に求め、「生徒の心に火をつける授業」を全教師が標榜していました。学校として大切な理念、目標を日々生徒と接する教師が言葉にし、意識し続けることで、生徒の意識変容を促し、学びの質を高めるのと同時に、それを魅力として捉える生徒の「構え」をつくれるのだと思います。

舟越 私は26年5月に横浜翠嵐高校を訪問したのですが、「高校生としての

青木 実際に自校で特色化・魅力化を推進していく上でのポイント、そして管理職に求められる役割や視点について教えてください。

佐藤 自校の取り組みについて、特色が明確かどうか、それが生徒にとって魅力になっているかを整理することから始めるとよいと思います。例えば、図3のような4象限マトリクスを用いて、自校の特色や魅力となっていると思う取り組みをプロットしてみます。取り組みの現状を可視化することで教師間の現状認識がそろい、改善の方向性についても議論がしやすくなるでしょう。ただし、同じ取り組みであっても、生徒一人ひとりが感じる魅力やその度合いは異なることや、一人ひとりの「多様性への対応」と併せて、社会

教師のやりがいがある
自校の特色や魅力を高める

「覚悟」という言葉を、管理職だけでなく、若手・中堅の先生が口にすることも聞き、すごいことだと思いました。

佐藤 公立高校には様々な経験、価値観を持った教師が異動してきます。だからこそ「本校のスタンダードはこれです」と、管理職が力強いメッセージを発信し続けることが重要です。

で生きていくために必要となる資質・能力を共通して身につける「共通性の確保」も学校には求められていることについて、教師間で共通認識を図ることが重要です。日々教室で多様な生徒に向き合いながら、生徒一人ひとりの満足感を高めつつ、共通性を確保していくために奮闘している先生方への敬意を管理職は忘れてはいけません。先



図4 「本校でどのような生徒を育成するか」プロジェクトの議論の成果

■本校で育成する資質・能力

・自己を向上させる力

意志力	主体的・積極的に物事にあたり、自分の考えをもって最後までやり抜く力
徹底力	健康な心身で自分を律しつつ、当たり前前を当たり前に行うことができる力
成長力	自分の現状を把握し調整しながら、確かな学力を培い、将来を展望する力

・他と協力し やり遂げる力

観察力	周囲の人・環境に関心を持ち、自分以外のことを知ろうとする力
共感力	多様な考えを受け止め、他者との関係性を築きつつ、物事を俯瞰的に捉える力
協働力	自分と他者を尊重し、共に物事を成し遂げる力

・物事を探究し 挑戦する力

洞察力	社会に対する関心を持ち、その状況を多面的に分析、考察できる力
活用力	情報等を選択・比較しながら、集団や社会のために活用していく力
創造力	既存の知識・経験を組み合わせ、新しいアイデアや解決策を生み出す力

■26年度の各教科における取り組み(抜粋)

・国語科

成長力	予習・復習を重視しつつ、生徒の学力に合わせた教材の活用と展開をする。
共感力	班別活動における資料作成と相互発表および相互評価を展開する。
洞察力	評論文や意見文の読解、および意見文の作成活動を展開する。

・地理歴史科・公民科

成長力	自主的な課題を設定し、取り組む。
協働力	共通のテーマ・課題に対し、多面的に考察し、合意形成を図る。
洞察力	なぜその歴史的事象・社会的事象が生じたかを考えさせる発問を行い、発表する。時事ニュースを授業の中で適宜動画で紹介する。



各教科における取り組みが記されている全体は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/ または右の2次元コードからアクセスしてください。



※学校資料を基に編集部で作成。

生方が多様な生徒を受け止め、新しい教育活動にも安心して挑戦していけるよう、先生方の心理的安全性が確保されているか、そして心の中に「余白」があるかどうか、ぜひ心を配っていただきたいと思います。

舟越 コーディネーターや学校に関心を持つ地域の人たちなどを、生徒を主語にした学校の未来をともに考える仲間として、その力を借りることも重要です。そうした方たちも交えて、図3

(P.6)などを基に、これからの学校のあり方を議論できればよいですね。
佐藤 多くの高校が小規模化し、生徒数も教師数も減少していますが、学校の業務は減らず、新しい課題も生まれています。教育力の向上は、学校だけで取り組むには限界があり、外部との協働が一層求められると思います。
舟越 特色化や魅力化の推進では、自校の教育目標や育てたい生徒像を確認することがその前提となります。管理

職はビジョンを示しますが、具現化していくのはミドルリーダーが中心の組織です。もちろん、特色や魅力のある教育課程を編成したり、生徒に育みたい資質・能力を具体的な教科や授業に落とし込んだりするためには、管理職が各教科の学習内容がある程度理解しておかなければ、先生方の課題意識に合った指針は出せません。私ももっと勉強しなければと思います。

佐藤 ミドルリーダーに任せる際には、どのように仕事を任せるかが極めて重要です。丸投げにも過干渉にもならないようにするためには、いつまでに、何を、どこに注意してやってほしいのか、要点を端的に言語化する力が管理職には求められると思います。

舟越 自分の学校に愛着があれば先生方は主体的に動き始めますし、愛着を持つてもらうためには、管理職が先生方に任せることが大切です。佐世保南高校では、「本校でどのような生徒を育成するか」プロジェクトを立ち上げ、育成を目指す資質・能力と、その育成のための授業のあり方を、各教科・分掌などの副主任が中心となって議論をし、「26年度 南高で育成する資質・能力」としてまとめました(図4)。学校のあり方を教師が主体的に考えていくようになれば、おのずと特色や魅力も高まっていくと私は思います。

青木 佐藤先生からは特色化・魅力化をけん引する管理職の先生方にメッセージを、舟越先生からは管理職としての今後の展望をお話しいただけますか。

佐藤 全国の校長先生と話す中で、私はすべての高校に特色・魅力はあると確信しています。だからこそ、まずは学校内で現状を言語化して共有することで、自校の特色や魅力を捉え直すことができますし、学校間でいろいろな知見を交換することで、さらに各高校の特色化・魅力化が進むはずですね。そして、生徒自身が自校の魅力を発信することで、中学生や保護者・地域にもそれが伝わり、社会の高校に対する見方がより豊かになると思います。

舟越 現任校のある佐世保市は重工業が市の基幹産業ですから、理系人材の育成は文理探究科を設置する本校の使命の1つだと私は考えています。そのような考えを先生方に伝えるとともに、先生方からも本校をどのようにに発展させていきたいかを聞き、ともに学校づくりをしていきたいと思っています。

佐藤 どの高校にも、生徒を多彩な学びや進路に導ける可能性があります。自校のこれまでのよさを土台として、生徒を主語にした特色化・魅力化を推進していただきたいと思います。
青木 ありがとうございます。

事例1 市部・公立

学校設定教科を学びの土台とし、 時代に対応する文理融合型の 新しい普通科を創る

熊本県・熊本市立必由館高校

特色化・魅力化の推進の背景

時代が求める普通科の学びを
現場の教師たちが模索

2024年度に普通科から文理総合探究科へと学科改編した熊本県・熊本市立必由館高校。2年間にわたる検討で校内の教師の合意形成を図った上で、探究を軸とする文理融合的な学びの実現に向けて、探究学習を始めとしたすべての学びを支える学校設定教科を設定し、キャリア教育や情報の充実に取り組んだ。さらに学年ごとの到達目標やその達成に必要な3年間の指導をグランドデザインに落とし込み、教師間で共有。その結果、学びに対する生徒の主体性の向上や探究学習の進路選択への寄与が、生徒の姿や声から確認されるとともに、教科を超えた教師間の連携も進んでいる。

2022年、熊本市教育委員会（以下、市教委）はこれからの社会を見据えて、主体的に学ぶ意欲や態度を育成する特色・魅力ある学校をつくるため、必由館高校に「新たな普通科教育を主とする学科」を設置し、教科等横断的・探究的な学びを充実させ、幅広い進路選択に対応する教育課程を編成する基本方針を示した（*1）。普通・国際・芸術・服飾デザインの4コースを設置する普通科であった同校はその方針に基づき、新学科名や教育課程の検討を始めた。佐藤宏一校長は説明する。

「前年度の21年度に素案が示されましたが、その内容は必由館高校のこれ

までの伝統にそぐわないのではないかとといった懸念の声が生徒や教職員、同窓生らから上がり、22年度の基本方針へと改められました。校内においても、社会が大きく変化する中、必由館高校のよさを生かしながら、生徒が学ぶ内容を自らの将来と結びつけて、主体的に学びに向かう学校づくりをしていくという機運が高まり、市教委とも協議を重ね、22年度から文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の採択校として、新しい普通科への改編に向けた検討が始まりました」

生徒の希望進路や興味・関心が多様化する中で、文系・理系を横断した視点を持ち、個別最適な学びを実現する必要性を多くの教師が実感していたと佐藤校長は語る。「何を教えるか」から「どのような資質・能力を育成する



カリキュラム開発・研究部
渡邊 健己
わたなべ・けんじ
同校に赴任して3年目。
理科（生物）。



デジタル推進部長
宮川 和之
みやがわ・かずゆき
同校に赴任して6年目。
情報科。



カリキュラム開発・研究部長
中島 千晴
なかしま・ちはる
同校に赴任して3年目。
音楽科。



進路指導主事
花川 貴三子
はなかわ・きみこ
同校に赴任して24年目。
英語科。



教頭
森田 勇
もりた・いさむ
同校に赴任して6年目。



校長
佐藤 宏一
さとう・ひろいち
同校に赴任して16年目。

*1 熊本市教育委員会「市立高等学校・専門学校改革基本計画（必由館高等学校編）」

どう進める？ 高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

か」への転換を図るべく、育成を目指す資質・能力の明確化も含め、市教委と同校の教師が検討を重ねた。2年間にわたる学校教育目標や新学科の教育課程の検討を経て、同校の普通科は、探究学習を軸とする文理融合の教育を特色とする文理総合探究科（文理・芸術・生活デザインの3コース）に改編し、24年度に1期生を迎えた。

具体的な取り組み

学校設定教科で、地域と連携した探究学習を支える

市教委と同校の協議の上で決定した新学科のキャッチフレーズ（現在の学校教育目標）は、「出あう つながるとともに創る」必由館でやりたいをカタチに」。新しい教育課程の特徴は「すべてを統合的に学習することだ（図1）。文理融合的な学びの軸となる探究

学校概要

設立 1911（明治44）年
形態 全日制／文理総合探究科／共学
生徒数 1学年305人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、高知大、福岡教育大、佐賀大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、熊本県立大、沖縄県立芸術大などに48人が合格。私立大は、駒澤大、武蔵野音楽大、龍谷大、福岡大、熊本学園大、崇城大、立命館アジア太平洋大などに延べ357人が合格。短大・専門学校進学80人。就職7人。

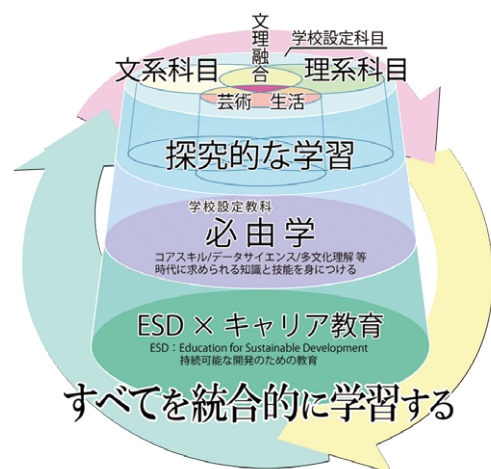
学習では、「感じる探究」イベントを開催。市役所や企業等のブースを生徒が巡り、地域・社会課題に触れて探究のタネを見つける。その後も各所と連携しながら、生徒が地域のおさや課題を自分ごととして捉え、課題解決に必要な思考力を3年間を通して育成する。様々な「ひと・もの・こと」に出あい、つながり、課題を設定し探究する中で、生徒は教科の枠を超えて知識を結びつけ、文理双方の視点を活用。成果を年度末の「探究フェスタ」で発表する。

探究を軸とする文理融合的な学びを支えているのが、1・2年次で必修の学校設定教科・必由学だ（図2）。

「必由学は、コアスキル・データサイエンス・多文化理解を柱とする、これからの社会ではばたかための基礎力の育成を目的として、週あたり1コマ実施しています。職業人へのインタビューや熊本の課題に関するデータの分析、海外との交流などを通して、探究学習は

もちろん、すべての教科・科目に必要で、生徒が実社会に出てからも役立つ資質・能力を育んでいます」（カリキュラム開発・研究部長・中島千晴先生）

図1 文理総合探究科での学び



※学校資料をそのまま掲載。

図2 学校設定教科・必由学で伸ばす力



※学校資料を抜粋して掲載。

24年度からDXハイスクールに採択されている同校では、必由学とDXハイスクールの取り組みを連動させた教科等横断型の学びも推進している。

「必由学で身につけた情報処理のスキルを生かして、体育や部活動で生徒たちが撮影した動画を基に動作解析を行ったり、探究学習の中で一流のアスリートと高校生とのフォームを重ね合わせて比較したりするなど、数理的アプローチに挑戦する生徒もいます」（デジタル推進部長・宮川和之先生）

半導体産業の拡大に伴い、熊本県内のデジタル人材の需要が急増する中、同校は25年度から市教委や熊本大学と共同して、小・中学生・高校生のDXと理系分野の基礎・応用力の育成を目的と

指す「みらいの科学者・DX人材共創プロジェクト」に探究学習の中で取り組んでいる。

「地域の小・中学生が理系・デジタル分野に興味を持つきっかけとなるよう、本校の生徒が教師役になり、小・中学生を前に電子顕微鏡や分光光度計といった機器を使って実験・観察を行います。本校の生徒にとっても、大学や企業が持つ最先端の機器に触れるよい機会となっています」（カリキュラム開発・研究部・渡邊竜己先生）

そのように、同校の生徒たちは必由学で身につけた様々な資質・能力を探究学習の中で実践的に発揮することで、高校での学びの価値を実感しながら教科の学びも深めている。

特色化・魅力化の推進のポイント

議論の進捗・内容を丁寧に見直し、目指す教育の形を可視化

普通科改編までの2年間の議論で管理職が留意したのが、校内の約70人の教師との合意形成だ。管理職・探究部長・教務主任などが参加し、週1〜2回の頻度で実施した「コア会議」では、新学科の教育課程について検討。コア会議のメンバーに各コースの主任や教科代表者などを加えた約20人が参加し、月1〜2回の頻度で実施した「学校改革プロジェクト委員会」では、学校設定教科・科目の研究などを行ないながら、各教科・分掌に議論の進捗を共有した。森田勇教頭は「会議は情報共有の場であり、教科を超えたコミュニケーションの場でもあった」と語る。

「会議では、教科・分掌を超えて先生方が率直に自分の考えや思いを語り合えるような雰囲気づくりに努めるとともに、少人数の話し合いは、できるだけ多くの先生にその様子を知ってもらうために、会議室ではなく、あえて職員室内のミーティングスペースなどを利用するようにしました」

そうして編成された教育課程の実施を経た24年度と25年度に、卒業を間近に控えた3年生を対象としたアンケート調査を行ったところ、総合的な探究

の時間を始めとする探究学習が「自分の進路に大きく影響した」「将来、社会に出ていく上で役に立つと思う」と答えた生徒の割合はいずれも90%以上だった。校内で開放されている最先端の設備を整えた「デジタル探究室」に自主的に集まり、創作活動や探究学習に取り組むなど、主体的に探究学習の問いを立て、課題に取り組む生徒も増え、教師たちは手応えを感じている。

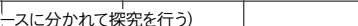
加えて、問題解決に向かう際の生徒の強みや行動特性を把握するために、25年度には1・2年生がベネッセの「GPS-Academic（*2）」を受検した。

「本校の生徒の強みである協働的思考力が向上していることが、『GPS-Academic』の受検結果で明らかになりました。必由学で身につけたスキルを生かした探究学習を通して、どのような資質・能力が生徒に育まっているのかを検証し、生徒が自身のキャリア形成に生かせる支援のあり方を考えていきたいと思っています」（進路指導主事・花川貴三子先生）

生徒の変容を起点にした本校の特色化や魅力化を追求し続けるため、26年度には学年ごとの到達目標やその達成に必要な探究学習などの流れを明確化した「グランドデザイン（図3）」を完成させた。それにより、必由学ではいつ、何を学んでいるのか、身につけたスキ

図3 総合的な探究の時間、必由学、情報、キャリア教育をつなげる3年間のグランドデザイン（抜粋）

【学年テーマ：夢を持とう!!】自己の興味・関心に基づく問いを深め、将来像を明確にするとともに、その実現に必要な論理的・批判的思考力や情報活用能力を育成する。探究活動や地域連携、発表の機会を通して、実社会とつながりながらキャリアビジョンを具体化する。
【手立ての重点】・校内外での発表機会の充実 ・地域（市役所等）との連携による社会との接続 ・キャリアビジョンの明確化と設計

		4月	5月	6月	7月
2年生	・キャリア教育 ・アセスメント ・LHR	スタディー サポート	コース選択 のための 進路探究	コース選択 のための 進路講演会 GPS- Academic	進研模試 (7月記述)
	探究の時間 総合的な	③個人探究（コースに分かれて探究を行う） 			
		【問いの設定】 スキル D、I		【情報収集（フィールドワーク、外部講師）】 スキル B、C、E	
	（スキル） 必由学Ⅱ	I：自己の現状を客観的に分析し、計画を立てる SWOT分析・学習理論	J：思考の可視化・事象の多角的分析・データ収集を実践する Visible Thinking・多文化比較・アンケート設計		
			K：質問力の向上・課題解決・データ活用を行う 質問力・在留外国人		
	情報Ⅰ	F：【知識】知的財産権（著作権）、個人情報、情報セキュリティ、情報モラルなど			

*学校資料を基に編集部で作成。総合的な探究の時間に書かれている「スキル」は、必由学で身につけるもので、具体的にどのスキルを用いるのかが明示されている。



グランドデザイン全体は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ルを各教科の授業などにどのように生かせるのか、すべての教師が考えやすくなった。グランドデザインを見た教師から、「各教科で協働的な学習が本格化する時期を考慮すると、人間関係の構築に必要なスキルを習得する必由学の授業は、もう少し早く実施した方がよいのではないか」といった声が上がりが、教科や分掌を超えた指導改善につながる意見交換が早速行われた。

佐藤校長が大切にしているのは、「ビジョンを明確に示しつつ、教師の挑戦を支援することだ」。

「必由学は、導入後2年間は有志の5人の教師がフロントランナーとして

指導計画を立案し、授業を担当しました。3年目となる26年度からは、これまでのノウハウを共有しながら、約70人の教師全員で取り組んでいます。チームティーチング形式を取り入れ、各教師には、必由学で生徒が身につけるスキルのうち、自分が得意とするものを踏まえて担当する授業を選んでもらうなど、先生方が安心して挑戦できる環境づくりをしています」（佐藤校長）

文理や教科、さらに学校の枠を超えて地域と連携した学びを実現した必由館高校。生徒たちが感じている自校の学びの価値を、同校の教師たちも確かに感じ取っている。

*2 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。

事例2
市部・私立

暗黙知として受け継がれてきた 全人教育の文化を言語化。 教師と生徒の共通の指針に 大阪府・私立大阪高校

特色化・魅力化の推進の背景

深刻な定員割れを機に、
魅力的な教育活動を模索

23年前の深刻な定員割れを機に、教育活動の改革を推進してきた大阪府・私立大阪高校。様々な試行錯誤の根底には、建学の精神である「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」に基づき、「生徒一人ひとりの成長のために」尽くす学校文化があった。2020年度からは目指す生徒像に「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を掲げ、生徒主体の多彩な活動を展開。生徒が企画・運営を担うオープンスクールや、身の回りの科学に関する事象をスケッチブックにまとめて他者に説明することを通じて科学リテラシーを社会に広めていく活動である「Nプロジェクト」など、独自の取り組みが定着し、現在ではそれらに参加することを目的に入学する生徒が増えている。

2027年度に創立100周年を迎える大阪府・私立大阪高校は、創立当時の社会課題の1つだった学校不足を解消すべく、「弱きものを扶ける」という理念の下で開校された旧制中学校を前身とする。「知育、徳育、体育のバランスの取れた全人教育」を建学の精神に掲げ、幅広く生徒を受け入れ、一人ひとりの成長を第一に考える教育を実践してきた。平野宏太校長は自校の文化をこう語る。

「本校は創立以来、進学実績に重点を置く教育とは一定の距離を取り、全人教育を基本としてきました。入学者は中学校時代の学力が中位層だった生

徒が中心で、やりたいことがまだ明確ではない生徒が少なくありません。そうした生徒が本校で力を伸ばし、やりたいことを見つけ、希望進路を実現できるように教師が寄り添う、その面見のよさが学校文化として根づいています」

しかし同校は23年前、深刻な定員割れを起こし、学校の存続が危ぶまれる状況に陥った。カリキュラムの改訂や制服の刷新など、あらゆる手を尽くし、08年度には男子校から共学化。そうして定員割れは解消されたが、以降も自校の特色を模索し続けたと、北村恭崇教頭は説明する。

「とにかく入学した生徒が大きく成長して卒業していつてほしいと、必死に教育活動を改善しました。しかし、何が生徒の確保につながっているかは

学校概要

設立 1927（昭和2）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約600人
2025年度卒業生進路実績 国公立大は、島根大、北九州市立大に2人が合格。私立大は、中央大、日本大、京都産業大、京都女子大、同志社女子大、立命館大、龍谷大、関西大、近畿大、大和大、関西学院大、甲南大、武庫川女子大などに延べ491人が合格。海外大は、1人が合格。短大・専門学校進学165人。就職20人。



石丸雄基
文理特進コース長
いしまる・ゆうき
同校に赴任して10年目。
理科（化学）。



宮本 聡
1学年主任
みやもと・とし
同校に赴任して7年目。
国語科。



辻 晃子
入試広報部部長
つじ・あきこ
同校に赴任して19年目。
3学年副主任。理科（生物）。



北村恭崇
教頭
きたむら・やすたか
同校に赴任して25年目。



平野宏太
校長
ひらの・こうた
同校に赴任して25年目。

図1 「主体的に行動する“オモロイ”18歳」の育成に向けた活動(例)

夏期・春期講座	教師が担当教科に加えて、趣味や勉強中の分野をテーマにした講座を開講。心理学やボクササイズなど、テーマは多彩で、年間約100講座を開講。
CHOLAゼミ(コラゼミ)	大学や専門学校、企業と連携して、様々な分野の学びに取り組む放課後講座(全3回)。年間約20講座を開講。
オホーツク学	東京農業大学と連携したプログラムで、オホーツクの自然や地域資源について現地に赴いて学び、日本の農学の未来や地域創生について考える。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 学校の魅力を発信する生徒の活動

OS委員会(オープンスクール企画運営委員会):2017年度～

オープンスクール(OS)や学校説明会の企画・運営を担う委員会で、生徒は立候補して委員となる。委員長・副委員長の立候補者は、立候補の理由ややりたい企画などを「熱血志望シート」という用紙に1,000字以内で記入し、入試広報部に提出する。同部の教師の入念な選考によって決定した委員長、副委員長は様々な企画を立て、委員に提案。委員はそれぞれ自分がやりたい企画に参加し、当日の運営まで担当する。25年度は委員長3人、副委員長10人で、約170人の生徒が委員として参加した。



OSでは生徒が発案した企画が実施される。

PR委員会:2019年度～

生徒目線での学校の魅力の発信を目的に、広告会社と連携してパンフレットやポスター、OSで配布するグッズなどを制作する。パンフレットなどに使う写真も委員の生徒が撮影。バスの車体広告(ラッピングバス)のデザインにも挑戦した。委員には立候補してなり、25年度は約40人の生徒が参加。



PR委員会が作成した27年度入試ポスター。

※学校資料を基に編集部で作成。

曖昧で、教師自身が自校の特色を明言できないような状態でした」

「ユニークな進学校」「あったかい学校」といったキャッチコピーを打ち出したこともあったが、自校の本質を表現しているとは言い難く、定着しなかった。進学実績を重視する方針への転換も議論されたが、創立以来の方針を貫き、結果的にその道は選ばなかった。そうした中、探究学習の力キュラムを考える際の参考にするため、京都府・京都市立堀川高校を20年度に視察。同校の最高目標「『自立する18歳』の育成」に着想を得て、当時教頭だった平野校長が、目指す生徒像として「主体的に行動する『オモロイ』18歳」を当時の校長に提案した。

「一見積極的ではない生徒も、心の

中では『何かを成し遂げたい』と思っています。そんな生徒が自分で課題を見つけ、動き出せるようになってほしいという願いから『主体的に』という言葉を入れました。また、『オモロイ』という言葉は、本校では心理学者の河合隼雄氏の著書での説明を土台として、『人の心や身体を動かすような』と解釈しており、『周囲を巻き込んで協働できる』という意味を込めています」

提案は承認され、その目指す生徒像は学内外で発信されるようになった。そして、「主体的に行動する『オモロイ』18歳」の視点で校内を見たところ、その育成につながる活動がいくつもあることに同校の教師は気がついた。

「本校は実に様々な挑戦をしてきましたが、その根底には常に『生徒一人

ひとりの成長のために』という軸があり、活動を経て成長していく生徒の姿も実際に見てきました。暗黙知として受け継がれてきた創立の理念や建学の精神を今の言葉に表現したのが『主体的に行動する『オモロイ』18歳』であり、生徒の具体的な姿から本校の特色が明確になっていきました」(北村教頭)

具体的な取り組み

様々な経験から関心を広げ、やりたいことを見いだす

同校では現在、「主体的に行動する『オモロイ』18歳」の育成に向け、生徒が関心を広げ、力を発揮できるよう、多彩な活動を展開している(図1)。

有志の生徒が学校の魅力を発信する

活動も同校の特色の1つで、具体的にはオープンスクール(以下、OS)の企画・運営を行う「OS委員会」と広報活動を行う「PR委員会」がある(図2)。OS委員会は、OSのプログラムの企画・運営、会場の設営や受け付けなど、全工程を担う。入試広報部長の辻見子先生はこう語る。

「私がOSの準備をしていた際、何かやりたそうにしていた生徒に『手伝う?』と声をかけたのが、OS委員会発足のきっかけでした。部活動のリーダー紹介や生徒が講師となる探究学習の模擬授業など、生徒がそれぞれ自分の言葉で本校での経験を熱心に語る姿は『主体的に行動する『オモロイ』18歳』そのもので、そうした生徒の姿を通じて本校の魅力が中学生や保護者に十分伝わっていると感じています」

委員長と副委員長には数十人もの生徒が立候補する。生徒は立候補の理由などを記した「熱血志望シート」を提出し、入試広報部がそれを基に選考する。

「OS委員会の活動がその生徒の成長の機会として最適か」という視点で部内で議論し、選考しています。選ばれなかった生徒には理由を丁寧に説明して、前向きなチャレンジにつながるよう「対話を重ねます」(辻先生)

生徒が科学と日常生活とのかかわりなどを学び、その内容をスケッチブック

図3 生徒主体の外部発信の活動

Nプロジェクト：2023年度～

同校の卒業生である京都大学複合原子力科学研究所の中村秀仁助教と同校の教師との対話の中で、文理の枠組みを超えて、生徒に科学へのワクワク感や科学リテラシーを持ってほしいという共通の思いが確認されたことから始まったプロジェクト。生徒は化学や地学、家庭科の授業、夏期特別講座などで、放射線やエネルギーといった社会的に重要なテーマについて学び、その内容をスケッチブックに手書きでまとめ、小・中学校での出前授業（写真上）や地域のイベントなどの場で小・中学生や市民に向けて説明する。参加は希望制で、イベントごとに募っており、ある小学校での出前授業には約100人が参加した。

25年の大阪・関西万博では、文部科学省のブースに出展して、来場者に「科学のワクワク」を伝えた（写真中）。世界各国から人々が来場するため、158か国語のスケッチブックを用意（写真下）。約450人の生徒（うち文系の生徒が65%）が交代でブースに立ち、6日間で約1万人と対話した。



※学校資料を基に編集部で作成。

クにまとめて発信する「Nプロジェクト」も同校の特色ある活動の1つだ（図3）。同活動では、文理の枠組みを超えて科学リテラシーを持つ社会をつくることを目指している。プロジェクトを担当する1学年主任の宮本聡先生は同活動を通じて生徒の変化をこう語る。

「小学校での出前授業では、生徒がスケッチブックを片手に自分の言葉で学んだことを語ると、小学生は『楽しかった！』『分かりやすかった！』などと言いながら笑顔を見せてくれます。そこでうれしさややりがいを感じた生徒は、うまく説明できなかった部分を調べ直したり、生徒同士で構成を議論したりするなど、自走するようになります。そして、その生き生きした生徒の姿を見た他の生徒が同活動に参加するという好循環が生まれていま

す。時には準備不足のまま本番を迎える生徒もありますが、教師は口出ししません。周りの生徒のスケッチブックの内容を見て『まずい』と気がつき、どうにか対処しようとする。それも貴重な経験だと私たち教師は捉えています」

最初は学校が用意した場でも、経験を重ねる中で自分がやりたいことを見つければ、生徒は自分で前に進んでいく。そのきっかけづくりこそが母校の強みだと、平野校長は語る。

「入学前にまだ明確な目標がなくても、本校の多彩な活動を通じて関心を広げたり、刺激を受けて学んだりする中で目標を見いだせばよいのです。それが多様な人が集まる学校教育の価値であり、本校が『全日制普通科の魅力』を最大限に発揮する』を目指す学校像に掲げている理由でもあります」

特色化・魅力化の推進のポイント

受容と寛容の姿勢で教師の挑戦を後押し

同校は、「学校で起こることはすべて生徒の成長の材料である」と捉えている。生徒を「個」で見えて、仮に問題が生じて、それを成長の機会に変えられるような支援を徹底している。その受容と寛容の姿勢は教師に対しても同様で、生徒の成長につながる挑戦を応援する文化が校内に根づいている。

文理特進コース長の石丸雄基先生は、同コースの生徒が学年やクラス（*クラス*）の枠を超え、個々の強みや個性を生かして切磋琢磨するコースづくりに挑戦中だ。

「まずは生徒たちが相互理解を深める機会をつくろうと、初回は気まずい雰囲気が生じることを承知で、異学年で対話をする場を設けました。目指すコースづくりの実現までは長い道のりですが、先生方も賛同してくれたため、実践に踏み切れました」（石丸先生）

平野校長は制度改革を行い、自らの背中を見せて、現場をけん引している。

「26年度から週5日制に変更し、生徒に時間を返しました。私は『責任と権限は現場にある』『生徒や保護者に説明責任を果たせば、結果として失敗しても、管理職が責任を取る』と公言しています。私自身が挑戦し続けると

ともに、先生方の挑戦を評価するのでなく、生徒の成長へ向けて同じ目線で助言することを心がけています」

同校は学校を社会に開くことも大切にしている。社会の中で相対化することで自校の価値がより明確になるためだ。それを校内で共有し、同じ方向を向いた学校づくりにつなげている。石丸先生はさらに次のように思いを語る。

「各校が独自に魅力化を図り、社会に発信することは、生徒を社会全体で支えるという思いの共有や、社会の教育全体の活性化にもつながるはずで、これからも広い視野でコースづくりをしていきたいと思っています」

また、同校は多彩な活動を推進する上で、各活動が属人化しないように留意している。立ち上げ時は特定の教師が中心となって動いたとしても、活動が軌道に乗り始めた段階でいずれかの校務分掌が担当するようにしている。

「生徒からは『自分が変わった』『挑戦する勇気を持った』といった声が聞かれます。OS委員会やNプロジェクトに参加することを目的に入学してくる生徒も増えました。現在は特別活動が本校の特色・魅力の中心ですが、授業の魅力化にも取り組んでいます。これから『主体的に行動する』『オモロイ』『18歳』を育成する学校づくりにまい進していきます」（北村教頭）

事例3 郡部・公立

地域資源・課題をテーマとする プロセス重視の探究学習を、 町役場と連携して進める 岩手県立葛巻高校

特色化・魅力化の推進の背景

町唯一の高校としての特色を生かした学校を目指す

地元自治体の強力な支援の下、連携型の中高一貫教育や「山村留学」の実施による県内外からの生徒募集などにより早くから取り組んできた岩手県立葛巻高校。葛巻町唯一の高校として、同町ならではの資源や課題をテーマとする探究学習を構築してきた。「町全体で人を育てる」という考えが根づく同町は、探究学習において高校生が試行錯誤するプロセスにこそ学びがあるという同校の考えに共感。同校の探究学習には町役場の職員を始めとする地域の人たちが多くかかわる。地域からは生徒がよく育ち、多様な進路を実現できる高校として評価され、山村留学により同校を卒業した生徒たちが、大学を経て社会人として再び同町に戻ってくる事例も複数生まれている。

岩手県立葛巻高校は2002年度より、同校が所在する葛巻町内の3つの町立中学校と連携型中高一貫教育を推進している。具体的には、数学、英語を中心とする全教科における授業交流や部活動交流など、地域に根差した特色ある教育活動に取り組んできた。

岩手県では少子化に伴う生徒数の長期的な減少が見込まれており、近年、公立高校の学級減や統廃合などの再編が課題となっている。そうした中で、葛巻高校を唯一の高校として擁する葛巻町は、同校が1学年2学級を維持し、教員数を確保することができれば、中高一貫教育を含む町の教育の持続可能

性は高まると考え、生徒募集の一環として「くずまき山村留学」を15年度に県内で初めて導入。寄宿舎の整備や町営学習塾の無料開放といった、葛巻町

による留学生への経済的な支援もあり、同制度導入以降、山村留学で同校に入学した生徒数は26年度に100人を突破した。

菊地健校長は「本校の特色は葛巻町唯一の高校として地域に大切にされていることであり、その特色を生かしながら、生徒が自身のキャリアを展望できる学校をつくるのが本校に期待される役割だ」と語る。

「高校等への進学率が約99%に達し、生徒の興味・関心、希望進路などが多様化している現在では、いずれの高校にも、自校に進学するどのような資質・能力が身につく、人生の可能性が開か

学校概要

設立 1948（昭和23）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約40人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、山形大、茨城大、宇都宮大、釧路公立大、東北公益文科大、高崎経済大に延べ7人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、宮城学院女子大、東北芸術工科大、中央学院大、大正大、東京国際大に延べ8人が合格。短大・専門学校進学15人。就職12人。

れるのかを、生徒や保護者に示すことが求められています。町の資源や課題を題材にした学びを町の人たちとともに体験できるカリキュラムを構築しつつ、そうした町での学びを通して育った生徒の姿を校外に伝えることで、葛巻高校は、地域の人たちが『葛巻町に葛巻高校はなくてはならない存在』『我



教務図書情報部
一ノ渡靖彦
いちのわたり・やすひこ
同校に赴任して5年目。
保健体育科。



教務図書情報部
島山幸治
はたけやま・こうじ
同校に赴任して6年目。
理科（化学）。



校長
菊地 健
きくち・けん
同校に赴任して1年目。

どう進める？ 高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

が子を葛巻高校に通わせたい」と思える価値のある高校になるのだと考えています」

具体的な取り組み

地域と強固に連携した探究学習を推進

葛巻町唯一の高校という特色を生かした同校の教育活動の中心に据えられているのが、総合的な探究の時間である「葛高ミライノカタチプロジェクト」だ。同校のスクール・ポリシーを踏まえて、同時期では「豊かな人間性」「地域貢献心」「思考力・判断力・表現力・探究心」を育成することを目指し、葛巻町や地元企業、近隣の中学校、大学などと連携しながら、1・2年次は2単位、3年次は1単位で地域の魅力や課題などをテーマとする探究学習に取り組む（図1）。

生徒が設定する課題には、「葛巻町・葛巻高校でしかできないこと」が求められる。例えば25年度の2年生は、葛巻町と協働して同町の特産品の1つである「くずまき鍋」の新商品を開発し、町民祭で地域の人たちに振る舞った。その商品は現在、地域の飲食店での販売が検討されている。また、26年度は「酪農の現状と葛巻町の魅力を知ってもらう」という目的の下、3年生が2

図1 総合的な探究の時間 大綱 「葛高ミライノカタチプロジェクト」概念図



※学校資料をそのまま掲載。

泊3日の酪農体験の旅を地元の酪農家と企画・考案し、試験的に実施した。地域と密接に連携した探究学習が実現できているのは、「町と学校が様々な生徒を受け入れ、育ててきた歴史があるからだ」と、教務図書情報部の山幸治先生は語る。

様々な背景を持つ生徒たちと長年接する中で、本校の教師、そして町の人たちの中に、高校生ならではの意見を受け止める土壌がより豊かに育まれていたように思います。実際、本校の生徒は探究学習を通じて町の魅力化につながる様々な提案を行っています。そうした生徒のアクションに対して町役場の人たちは「それ、面白いね」「一緒にやれるか考えてみようか」などと、常に肯定的に生徒に向き合ってくれます。

同校の教師たちは生徒の探究学習に伴走するが、町役場を始めとする地域の人たちとのやり取りは多くの場合、教師を介さず、生徒が直接行っている。

「外部の方とのオンライン会議も生徒は自分たちで設定しますし、校外活動の実施要項は生徒が作成し、起案します。時には失敗しながらも、自分たちで何かを成し遂げるプロセスを高校時代に経験

できることは、今後の進路やキャリアの可能性を大きく広げることにつながると考えています」（畠山先生）

教務図書情報部の一ノ瀬靖彦先生は、成果以上にプロセスに価値を置く自校の探究学習観に地域の人たちも共感してくれていると感じるという。

「生徒の考えには、詰めが甘い部分も少なくないと思います。それでも、高校時代に他者と協働して試行錯誤する経験の価値を分かってくれている町役場の皆さんは、生徒の話にじっくりと耳を傾けてくれます。人を育てることの大きさを町と共有できていることは本校の大きな強みの1つです」

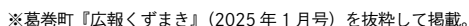
特色化・魅力化の推進のポイント

目的に立ち返れるように取り組みを見える化する

探究学習を始めとする同校の教育活動の実態を地域に伝えることも、同校と町が一体となって進めている。

例えば、同校の探究学習の成果報告会は葛巻町教育委員会（以下、町教委）の協力の下、例年町役場庁舎の多目的ホールで開催している。また、同時期に、約1週間にわたって庁舎内の廊下に探究学習に関するポスターを掲示し、町民への周知も行っている。さらに、毎月発行される町の広報誌でも、

岩手県立葛巻高校レポート



同校の教育活動を2ページにわたって紹介している(図2)。

そうした学校へのかかわりを今後も維持・拡充してもらうため、同校の教師たちは機会があれば町役場を訪問し、町教委はもちろん、それ以外の部局の職員ともコミュニケーションを取ることを心がけている。

「役場内で異動があっても、『学校のこととはあの人にも相談できる』といった関係性をいろいろな人と構築しておけば、教育活動の持続可能性を向上させることができます。本校のことをよく知っている人、本校とかかわったことがある人を、1人でも多く増やしていくことが重要です」(畠山先生)

「葛高ミライノカタチプロジェクト」
概念図（P.15図1）を作成したのも、
これまで同校が取り組んできたことを
言語化することで、同校の教師全員が
探究学習の目的や3年間の流れについ
て目線合わせをしやすくし、活動の持
続可能性を高めるためだ。

「特色化や魅力化を意識しているとい
うよりは、目の前にいる生徒にこれから
の社会で求められる資質・能力を育成
する」といふ思いで探究学習をブラッ
シュアップしてきました。それを言語化
したことで、本校の特色や立ち返る軸
が明確になりましたが、社会や教育環
境はもちろん、生徒も教師も変化して
いきます。概念図自体も、そうした変

教育委員会が**考**える

特色化
魅力化

学びを活性化する環境を守り、
学校の主体的な取り組みを支援

岩手県教育委員会事務局学校教育室 高校改革課長
田山健太郎



岩手県は2021年10月、各県立高校が特色・魅力ある学校づくりを主体的に推進できるよう、今後の県立高校のあり方や関係機関と連携した特色ある教育課程の例などを示した「いわての高校魅力化グランドデザイン for 2031（岩手県立高等学校に関するスクール・ミッション）」を策定しました。同グランドデザインでは、高校の特色や魅力を考える3つの枠組みとして、「地域連携」「学術・国際連携」「産学連携」を設定しました。各校はそれらの枠組みを意識した上でスクール・ポリシーを策定し、地元自治体、企業、研究機関などの連携先と協働しながら、研究特色・魅力化を進めてきました。

一方で、生徒数の減少が避けられない中、26年4月には、小・中学生と高校生からの意見聴取や地域での説明会などを経て、「第3期県立高等学校再編計画」を取りまとめました。同計画では、高校教育の質を維持するために、各校1学年20人を超える生徒数は必要とし

た上で、一定の条件を満たす1学年1
学級の普通高校を「地域校」として位
置づけ、地域の教育機会を保障する考
えを示しました。今後、本県内でも小
規模校は増加していく見通しのため、
遠隔教育や小規模校間での生徒同士の
交流などを充実させることで、学びの
活性化を図っていきたいと考えていま
す。また、地域産業との連携やICT
の活用を推進することを通じて多様な
学びと進路支援の実現を図り、教育の
質の向上と機会の確保を両立させる方
針です。

特色化・魅力化は、各校が地域・生徒の状況に応じて主体的に取り組むものであり、教育委員会が果たすべき役割はその後押しであると考えています。既に各校の教育活動の発信の基盤となるウェブサイトの整備は完了し、葛巻高校などで実施してきた県外からの「いわて留学」も、18校が実施するまでになりました。今後も各校の教師や生徒と対話を重ねながら、岩手県としてのの「特色化・魅力化」の取り組みを模索していきます。

本特集を振り返って

各教師・生徒が思う自校の特色・魅力を
言語化し、共有する

本特集の課題整理において、全国普通科高等学校長会の佐藤^{いさお}事務局長が「私はすべての高校に特色・魅力はあると確信しています。だからこそ、まずは学校内で現状を言語化して共有することで、自校の特色や魅力を捉え直すことができます」とおっしゃっていましたが、まさにそれは、長崎県立佐世保南高校の舟越^{ふし}裕校長のご実践や3校の事例の共通点の



VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇

1つであり、本特集の冒頭で提示した「各校は特色化・魅力化をどのように進めていけばよいのか」という問いを考える上で、大きなヒントになったのではないのでしょうか。自校に特色や魅力が存在するにもかかわらず、それが何なのかは教師や生徒の間で共通認識が図られていなければ、「自校にはこれといった特色や魅力はない。何か新しい取り組みを考えなければ……」といった状況に陥りかねません。そうならないためにも、各教師・生徒が自校の特色・魅力だと思っている点を言語化することが重要であり、そしてそれこそが共通認識を図る手立てであるとともに、特色化・魅力化を進めていく上で中核となるものだと考えます。一案ですが、次のようなステップで自校の特色化・魅力化を推進していくとよいのではないのでしょうか。

- ステップ1** 特色化・魅力化の推進のステップ（本ステップ1～5）について共通理解を図る
- ステップ2** 特色化・魅力化のそれぞれの意味や相互の関係の理解（P.5図1・2）を学校全体で図る
- ステップ3** 自校の最上位目標、育てたい生徒像を確認する
- ステップ4** 自校の現状について、特色化の度合いと魅力化の状況の2軸による4象限のマトリクスで整理する（P.6図3）
- ステップ5** ステップ4を踏まえて、地域や外部とも連携・対話をしながら、取り組みの改善や新しい取り組みの検討をする

特色化・魅力化の解釈がぶれていると、自校の魅力・特色を言語化できたとしても共通認識が図れたとは言えないため、早い段階でその点は確認しておきたいところです（ステップ2）。また、ステップ5の取り組みの改善や新しい取り組みの検討が「生徒を主語にした」ものになるように必ず立ち返るべきなのが、スクール・ポリシーや育てたい生徒像などの最上位目標であり、その点も早い段階で確認しておきたいことから、ステップ3に配置しました。

言語化の過程で行われる教師間の対話では、教師一人ひとりが安心して話せる環境づくりが求められます。他者の発言・提案を否定・評価せず、挑戦することを歓迎する姿勢を、管理職の先生が率先して見せていくことが重要ではないのでしょうか。

化を踏まえて改善していくものだと思います」（一ノ渡先生）

こうした探究学習を継続してきた結果、自ら探究学習のテーマを設定し、楽しく、主体的に取り組む生徒が増えてきた。大学入試や就職活動における採用選考の面接において、高校時代の探究学習の経験を語る際には、多くの生徒が成果ではなく、町の人たちと協働した経験、すなわちプロセスを語っている。

生徒の言葉で探究学習を発信する場合は、日常的にも設けられている。

「約60校の岩手県立高校は岩手県教育委員会のウェブサイトを通じて、自校の教育活動を発信しています。本校も探究学習の進捗や寮生活の様子などを発信していますが、記事の4割程度は生徒や卒業生が執筆しています。教師による記事のチェックは最低限にとどめ、できるだけ生徒自身の言葉で、生徒が感じている本校の魅力を全国に伝えるようにしています」（畠山先生）

近年、葛巻町の中学校を卒業した生徒の7割程度が葛巻高校に進学している。同校以外の高校に進学する場合、

その多くは、部活動を理由とする都市部の私立高校への進学だ。葛巻高校では26年度も「物理」や「情報」で遠隔授業を実施し、生徒が専門的な指導を受けられる体制を継続。国公立大学への進学から就職まで、多様な進路を実現する同校の教育活動は地域の生徒や保護者に評価され、選ばれる高校となっている。

山村留学開始から10年以上が経過した現在、関東や関西の大学に進学した県外出身の生徒たちが、社会人になって葛巻町に戻ってきているという。

「葛巻高校と葛巻町が、自分が成長した場所、豊かな人間関係が築かれた場所であることから、彼らは葛巻町に戻ってきているのだと思います。生徒の人生の可能性を広げているという点で、本校は町とともに、生徒に対して魅力を発揮できているのだと考えています。今後も地域とつながり、探究学習の目的に常に立ち返ることで、教師間の熱量を学校全体のものとしながら、生徒の成長のための取り組みの深化を町とともに図っていききたいと思っています」（菊地校長）

「葛巻高校と葛巻町が、自分が成長した場所、豊かな人間関係が築かれた場所であることから、彼らは葛巻町に戻ってきているのだと思います。生徒の人生の可能性を広げているという点で、本校は町とともに、生徒に対して魅力を発揮できているのだと考えています。今後も地域とつながり、探究学習の目的に常に立ち返ることで、教師間の熱量を学校全体のものとしながら、生徒の成長のための取り組みの深化を町とともに図っていききたいと思っています」（菊地校長）